

# 小学校社会科の授業のユニバーサルデザイン

## 第2回 「社会科授業のUDとは ～社会的見方・考え方～」

### ◆社会科は苦手

社会科が好きではない、苦手だ、よくわからないという子どもは多い。教師も同様だ。教師の意識が子どもの意識には反映しているのかもしれない。『第5回学習基本調査』（ベネッセ教育総合研究所）によると、社会科が「とても好き」あるいは「まあまあ好き」と答えた小学生の割合は55.6パーセントだ。国語（58.5%）、算数（68.4%）、理科（75.2%）と比べ低い。粗く言うと、社会科授業が始まる時点で、教師の目の前に座っているクラスの子の半数は、すでに授業から脱落しかけているということだ。この厳しい状況を乗り越える一つの道筋として、授業のUDを考えたい。

### ◆社会科授業のUDとは

社会科授業のUDとは

学力の優劣や発達障害の有無にかかわらず、すべての子どもが、楽しく「社会的見方・考え方」を獲得できるように、工夫・配慮された通常学級における社会科授業のデザインである。

### ◆「社会的見方・考え方」とは

社会科授業で最も大切なこと、すなわち本質とは何か。それは「社会的見方・考え方」を獲得できるようにすることである。

「社会的見方・考え方」とは、様々な社会的事象に転移する汎用性の高い概念である

例えば、様々な社会的事象を見るときに使える眼鏡だ。その眼鏡があると世の中の様々な社会的事象の意味が見えてくる。

中学年の子どもたちに「スーパーマーケットを知っていますか？」と尋ねると、「よく行くよ」「〇〇スーパーは安いよ」「お母さんは安売りの日にまとめ買いするよ」など、多くの気づきが返ってくる。しかし、それらの気づきは、目にしたことがある、行ったことがあるというレベルにとどまっていることがほとんどである。スーパーマーケットの品揃えを客層との関係から説明できる子どもは多くない。ましてや販売者が、消費者のニーズを徹底的に分析し、商品管理・商品陳列を工夫していることを説明できる子どもは、まずいない。

社会科授業でスーパーマーケットを取り上げたならば、「スーパーマーケットで働いている人たちは、国内外とかかわり、買う人の願いを考えながら売るための様々な工夫を行い、わたしたちの暮らしを支えている」という概念を、すべての子どもに定着させなければならない。スーパーマーケットを単なる建物、商品陳列場所、商品購入場所としてではなく、

販売者と消費者の願いや意図が重なった集合体として、とらえられるようにしなければならない。子どもが、そのようにスーパーマーケットをとらえたとき、「スーパーマーケットに対する見方・考え方が身についた」といえ、本質的意味を理解したといえる。

スーパーマーケットに対する見方・考え方を手に入れることのよさは、スーパーマーケットの本質的理解にとどまらない。特定の社会的事象に対する見方・考え方は、本質的意味の理解を促すとともに、多くの似た社会的事象に転移し、それらの本質的意味の理解をも導き出す。スーパーマーケットの学習で、「売る人は、お客さんの好みをしっかり調べて商品を並べているのだな」という見方・考え方を得た子どもなら、自動車産業の実に多種多様なラインナップと消費者の多様なニーズをつなげて考えることは十分にありうる。そうなったとき、「スーパーマーケットに対する見方・考え方をを使って、自動車産業を見たり考えたりした」といえる。これが転移である。

子どもは身のまわりにある無数の社会的事象すべてについて具体的に時間をかけて学ぼうわけではない。年間 70~105 時間の社会科の授業ですべてを取り上げることはできない。それゆえ「一を学んで十を知る」ことが大切だ。社会的見方・考え方は「一を学んで十を知る」ための貴重なツールである。

社会的見方・考え方は、次のように分類できる。

社会的見方	事実を調べることで得られる概念	「いつ」「どこで」「誰が」「何を」「どのように」
社会的考え方	因果関係を考えることで得られる概念	「～なのは、～だからだ」 「～だから、～なっている」
	価値判断することで得られる概念	「正しいか」 「いちばん良いのは」 「どうすればよいか」

沖縄の家の写真を読み取る授業を例に考えてみる。

まず、沖縄の家であること、白い家が多いこと、コンクリートブロックの家が多いこと、屋根が平らな家が多いこと、貯水タンクが多いことなどの事実を資料から読み取れなければならない。このような沖縄の家の具体的な特徴が読み取れた状態を、社会的事象（沖縄の家）の特徴が「見えた」という。

特徴が見えたら、その理由を考えることになる。沖縄の家の特徴を、台風の多さ、高温多湿な気候、河川の短さなどから説明できたとき、沖縄の家について「考えた」という。ここでは社会的事象（沖縄の家）の特徴を自然条件と結び付けながら考えているが、他の社会的事象であれば、経済的条件、政治的条件、歴史的条件などと結び付けて「考える」こともある。

また、社会的事象によっては、授業をもう一步進めて、現状は正しいか正しくないか、いちばん良い方法なのか、どうすれば解決できるのかなどを判断する場面が想定される。そういった価値判断も、社会的事象について「考える」ことの一つである。

「社会的見方」は主に「When」「Where」「Who」「What」「How」を問いにした結果得られる概念であり、「社会的考え方」は主に「How」「Why」「Which」を問いにした結果得られる概念といえる。したがって、様々な社会的事象に転移可能な概念である見方・考え方を定着させるためには、「When」「Where」「Who」「What」「How」「Why」「Which」の問いそれぞれを、軽重を考えながらバランスよく単元に位置付けることが大切である。

社会科では、「社会的見方・考え方」を獲得させることをめざす。一人残らず「すべての子ども」が獲得することをめざす。そのためには社会科授業をUD化する。社会科授業をUD化する際に特にポイントとなるのが、次の3点である。

視覚化	焦点化	共有化
-----	-----	-----

次回からは「社会科授業の視覚化」「社会科授業の焦点化」「社会科授業の共有化」について考えていく。

---

#### 【参考文献】

岩田一彦『小学校 社会科の授業分析』東京書籍 1993年

村田辰明『社会科授業のユニバーサルデザイン』東洋館出版社 2013年

#### 村田辰明（むらた・たつあき）

関西学院初等部副校長。日本授業UD学会関西支部代表。  
すべての子どもが楽しく「わかる・できる」授業をめざし、社会科を中心に研究・実践を続けている。

(2016年5月執筆)